



福岡県豊前市 小今井潤治銅像

著者	田鍋 隆男
雑誌名	人間文化研究所年報
号	28
ページ	65-77
発行年	2017-08-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1219/00000936/

福岡県豊前市 小今井潤治銅像

田 鍋 隆 男

はつらひ

福岡県の東部、周防灘に面した豊前市街のほぼ中央部、JR日豊本線宇島駅から東へ一五〇メートルほど行ったところに、東西に通る県道一三号線の東八幡交差点がある。そこから県道三二号線（通称市役所通り）を南進して市役所方向へ進んだ左手に豊前市立八屋中学校があり、その反対側の右手にある道を入れて数十メートル進んだ左手に大きな木が茂る小高い丘がある。そこに高さ一メートルほどのコンクリート製の小今井潤治の胸像が頂上にのつた、高さ一〇メートル近くの立派な石造の台座がある。この台座の横には浄土真宗本願寺派の大谷尊由が「浄土真宗乗桂校旧跡」と揮毫した、昭和八年（一九三三）に建立された石碑が建っている（資料4）。今では付近は住宅地となつて当時を偲ばせるものはないが、ここにはかつて小今井潤治が創設した乗桂校があつて、多くの若者らが学んだその構内の一角に銅像「小今井潤治像」（資料1）が建立されていた。

大正五年（一九一六）十月に建立された小今井潤治銅像は、羽織袴を着し、両手を垂下し、左手に念珠を持つて宇島港方面を見据えて直

立した、高さ約二一〇センチメートル（七尺）の青銅製の立像であつた。しかし太平洋戦時下、昭和十七年頃から全国的におこなわれた戦時金属特別回収によつて供出され、その代替として今あるコンクリート製の胸像（註1）が台座の上に設置されたのである。その胸像も羽織を着て正面を向いており、以前あつた銅像の上半身を再現したものである。

小今井潤治（一八一四～一八八七）は幕末明治期の豊前宇島で一時代を築いた豪商「萬屋」の主人であり、また明治九年（一八七六）の六十三歳のときに、浄土真宗本願寺派第二十一世法主の明如上人（大谷光尊）から「乗桂」という法諱を下賜されたほどのたいへん熱心な浄土真宗門徒でもあつた。その功績は豊前市内の浄土真宗寺院の普請をはじめ、明治十二年には独力で浄土真宗の私立大学校「小今井乗桂校」を開校したことで知られている（註2）。このような地元への多大の貢献に対し、大正五年に川内寿一ら有志者六氏が建設委員となつて銅像建設が発起された（註3、資料3）。原型は、同年十月一日から浄土真宗の教義を教育理念とした福岡市内の筑紫高等女学校（現・筑紫女学園中学・高等学校）の図画科教諭となつた彫刻家田中雪窓が制作

した。鑄造は同市内の大学通一丁目（現・東区馬出三丁目）にあった石橋鉄工所の石橋卯之吉と同勘助が担当し、竣工したのちの十二月十三日に、博多横町（現・博多区下呉服町）の石工国松藤次郎と同藤七が制作した石製台座の上に据え付けられた（註4）。

この稿では戦時金属特別回収で消失した銅像「小今井潤治像」を紹介する。

小今井潤治について

小今井潤治については台座背面に嵌入されている、これまた青銅製ながら回収を免れた碑文（資料2）に詳しく書かれている。碑文はすべて漢文で書かれており、漢字の総数は一五九五字である。なお撰文は本願寺執行長や立教七百年記念慶讃事務理事長、さらに龍谷大学財団理事長などを歴任した、大分県中津市にある浄土真宗本願寺派照雲寺の住職松島善海（一八五五～一九二三）によるものである。

それでは碑文をもとに小今井潤治の経歴をみてみる。

豊前宇島は古くは「鵜洲」と称された風光明媚なところで、北は遠く海を隔てて防長を臨み、南は油布彦岳（由布岳・英彦山）一帯の連山へと通じる。古来山川靈淑の気に満ちたところに偉人が生まれるといふが、文化十一年（一八一四）八月十六日、小今井潤治は上毛郡小祝村（現・大分県中津市小祝）に亀安正広の第三子として生まれた。母は大江氏の出である。諱は末広、通称助九郎といい、のちに潤治と改名、号は龜遊と称した。一家は文政年間（一八一八～三〇）に小祝

村から宇島村に転居している。幼い時からたいへん俊敏で賢い子だったので、その聡明さを見込んで叔父の小今井助右衛門が潤治を長女の配偶者として迎え、小今井家の養嗣子とした。家督を継いだ潤治は家業に励み多年の刻苦にも耐え、斯道の秘奥を見極め、機を見ること神億のごとくにして、しばしば人の意表をつくような企画をたてたりして、中国漢代の英傑張良の知恵と勇氣にたとえて商界の名將と称えられた。人は偉人のお陰を受けようとするものだが、小今井潤治は人々が縦横に馳駆するのを見守り、その気は万軍を圧するような勢いに満ち、もはや敵対するものはいなかった。しかし潤治が常に口にしていふことは、勝つことに慣れて何とも思わないものは智者ではない。退守の時を失わず一進一退をくりかえすことにより、必ず好機が訪れそして巨万の富を築くに至ると。こうして、人々が九州の素封家として真つ先に挙げる人物は、宇島の萬屋の小今井潤治というようになった。

明治十一年（戊寅、一八七八）、汽船「龍丸」とさらに「大龍丸」を建造して商船会社を設立し海運業に従事していたころ、潤治は自分の事よりも窮民を助けることに意を注ぎ、毎年米四一〇余石と金八〇〇〇余円を拠出した。また数年かけて宇島港を改修するとき、一般町民がその巨額の費用を負担することがないように配慮し、みずから巨費を投じて完成させた。民が益するようにその徳が身に着くようにするその心情は、慈母が赤子に与える正にそれであった。潤治は多年小倉と千束両藩に身心ともに尽くして勤め、時には献金することで藩の用度に応じた。是により両藩主から、ときどきその功勞を賞して名

刀や書画幅などが下賜された。ときに昇任して馬廻班に列されたこともあり、実に一家の光栄といふべきものであった。また中津藩のために尽力し藩主から物賞を賜ることもあったが、廃藩以後はますます公共のために尽瘁することになる。

明治七年（甲戌、一八七四）には小倉県庁に教育資金として一〇〇〇円を献金。また火災によって二三戸が罹災すれば、義捐金八五〇円を寄付し官庁から銀盃を、さらに道路修繕費として一〇〇〇円を寄付したので三重銀盃を受領した。翌年にはまたしても火災にあった町民のために四六〇円を拠出、さらに困窮している土木事業従事者の糊口を凌ぐために工賃を拠出した。明治九年（丙子、一八七六）には県下の奨学資金として一〇〇〇円を提供し三重銀盃を受領。このほかに小今井潤治の義拳は枚挙に遑なく、慶応のころから拠出してきた義捐金は二〇万円を下らないという。

潤治は以前から浄土真宗に帰依し、晩年に至って信心は益々深まり、自ら世に処することは務めて仏恩に報いることを常念とした。手には常に念珠を執り、その心は仏が安置されたお堂のごとく壮大華麗にして宏壮にして清浄であった。よってその室に入る者は自然と崇仰の念が毎朝生じたのであった。潤治は自ら礼誦を作り家族皆も同様に列して求法のために唱和した。時には遠く離れた、都会であろうが田舎であろうが知識を得るために訪ね行き、身を挺して高僧に教えを請い、講話を聞くことを無上の楽しみとしていた。

潤治がかつて、宇佐宮の神輿が村に入る夢を見たとき、翌日、釈迦が七つの場所で九回の集会を開いて説法をおこなっている画を持った

客人が来た。話を聞くとこれはもともと宇佐宮の神輿の内側に貼られていたもので、王政維新後にはがされ、廻りまわって自分の手に入ることになったという。潤治はこれは正夢だと思い直ちにこれを買求めた。そして上洛して本山を参詣しこれを進納した。このとき法主明如上人に面会することができ、殊に厚遇されて「乗桂」という法諱を賜わった。さらに上人自筆の短冊や懐紙に書かれた自製の和歌をはじめ、正信偈和讃の一部を認めた額、中国南宋末から元時代にかけて活躍した文人画家趙子昂の帰去来書画幅、同人の馬画幅、および銀天目が下賜された。

小今井潤治は数々の寄付をしている。明治七年（甲戌、一八七四）、光専寺が本堂を改築するというので三五〇〇円を寄付した。同様に正円寺の本堂や、正法寺の厨房、教円寺の本堂と正門を改築するときもそれぞれの寺に寄付をした。さらに神像が相撲をとるので有名な八幡古表神社の拝殿修築や池田（足切）神社の参拝道の整備にも寄付している。さらに慶応元年（乙丑、一八六五）にあった乙丑の役に際し、小倉藩は大砲を作るために諸寺の梵鐘を供出させたので、諸寺が遺憾に思っていることを知り、巨費を投じて梵鐘五八口を鑄造して梵鐘を失った各寺に納めることにした。また明治八年（乙亥、一八七五）には菩提寺に大蔵経を奉納している。先人がかつて浄財を募ってこれを購入しようとしたところ、黄檗山で一〇のうち三つが手に入らなかったというので、これまた巨費を投じて黄檗本二〇〇余帙を求めてその不足分を補完した。明治十年（丁丑、一八七七）の冬には、慈恵活動を補助するために楽善社へ五〇〇円を寄付している。

明治九年（丙子、一八七六）に明治新政府が国民の信教の自由を許したので、これによって外来の宗教が蔓延した。潤治はこれを憂い、さらに宗門の前途を深慮して僧侶に接するたびに慨然として、こんにちの宗門の急務はひとえに人材の育成であると説いた。そこで明治十二年に潤治は、浄土真宗の教えに根差した私立大学校を設立開校し、「乗桂教校」と命名した。浄土真宗本願寺派の学林（今の龍谷大学の前身）から東陽円月（一八一八―一九〇二）ら勸学諸師を招聘して熱心に教育に取り組んだ。その名声は四方につたわり学徒は遠くからも笈をかるって登校し、学業は隆盛をきわめ他校の追隨を許さなかったという。潤治の宿志はここに達成され、爾来一〇年間に同校へ入学したものは約三〇〇〇人。今や真宗の干城となるが、その間におよそ二〇万円もの巨費が投じられたという。

そして明治二十年（一八八七）七月十三日、潤治は浪華の別邸で突然病にかかり薬石の効もなく逝去した。享年七十四歳であった。翌日に仮葬儀が行われ、遺骸は宇島に運ばれて十七日に葬儀、檀山にある先祖伝来の墓に葬られた。潤治には五男五女の子がいたが、長男高之助は早世し、二女は菅原家に嫁ぐが逝去、二男の宗治も家督を継いで間もなく逝去している。このように子供たちは次々と亡くなり、宗治に嗣子が無かったので、親族の合議によって甥の小今井正史が家督を継ぐことになった。

今回、小今井潤治没後三十年にあたり翁の遺徳を偲んで、有志諸士の拠金により銅像を建立し、その功績を末永く伝えるように銘板に刻むことになった。銘に曰く、「豊前に偉人あり、商界の傑人なり。巨

万の富を得るが、その心は高潔にして、常に公益のために図る。時には多くの金を拠出し、憐れんでは窮民に施し、その恵は普く行き渡った。晩年には三宝を敬い、その浄信は堅固である。学校を建て人に教育を施し、仏法を護り続けた。地元の人々の追慕の念は深く、銅像および碑を建立し、その遺徳がいつまでも伝わるよう、その英姿を仰ぎ見ることができるようにした。」

銅像の作者田中雪窓について

銅像原型の作者は、大正五年（一九一六）十月から亡くなる昭和六年（一九三一）二月までの十四年四か月間、福岡市警固本通り（現・福岡市中央区警固）にある、筑紫高等女学校の図画科教諭をつとめた彫刻家田中雪窓である（註5）。

田中雪窓は明治四年（一八七一）六月一日に福岡城下（註6）に於いて、福岡藩御用具足師の田中源工貞成（註7）を父に、平野吉藏能栄の次女ツチ（註8）を母に長男として生まれた。本名を助太郎といい、地元の小学校を卒業後長崎に行き、加伯利英和学校（註9）を明治二十年（一八八七）七月に卒業。その間に長崎の日本画家塚本梅雪に書画を学び、「雪窓」の雅号を得ている。以後この雅号を彫刻にも絵画作品にも使用しており、本名よりも雅号に愛着をもっていたと思われる。筑紫高等女学校に採用されるときに提出した自筆履歴書には、本名でなく雅号の「田中雪窓」を用い、その左わきに小さく本名の「助太郎事」と記しているほどである。長崎遊学中には、美術のほか課

外に漢学を宗および辛島氏のもとで学んだり、在留アメリカ人に絵画の家庭教師をしたりしている（註10）。

その後上京して明治二十二年（一八八九）九月、東京美術学校（現・東京芸術大学）に第二回生として入学（註11）。明治二十四年七月に二年間の普通科を終えて、九月に専修科の彫刻科に進学した（註12）。このころの彫刻科は木彫に限られており、斯界の泰斗高村光雲教授の指導を受けている。明治二十四年の美校あげての大事業であった楠公銅像制作のときには、光雲の原型制作の一部を手伝った（註13）という。

この経験のうちに大きな銅像を制作するときに大いに役立ったと思われる。また専修科二年のときに制作した「牛置物」は、翌年の明治二十六年に米国シカゴで開催された万国博覧会に出陳されている（註14）。さらに彫刻ばかりでなく、雅号を賜るほど親しんだ日本画の研究を積むために、同校の日本画教授巨勢小石の画塾に通って、巨勢金岡派の画風も研究している（註15）。明治二十七年七月に東京美術学校本科を卒業、明治三十年七月には函画教員の免許状を取得している。以後東京、高知、鹿児島、熊本県下の学校で美術教諭として赴任（註16）しているが、大正五年十月一日には郷里にもどり筑紫高等女学校に嘱託として採用され、半年後の翌年四月二日には正式教諭となっている。

雪窓は多忙な教員のかたわら寸暇を惜しんで銅像制作に従事している。雪窓は東京美術学校在学中に郷土の勤皇の志士であり自分の叔父の肖像を、平野国臣の兄弟姉妹が生存中に取材して描き上げることがを発起し、様々な人の意見を聞いてまわって肖像の完成度を高めようと

努め、描き終わるのに八年を費やした（註17）。雪窓の人物彫刻制作に対する姿勢が伺える。そして雪窓は明治四十四年に発会した平野国臣先生顕彰会に、熊本女学校に本格的に就職した大正三年から補佐するようになる。同年の夏には同会の事業に専従して国臣の相貌や故実などの調査研究に専念し、銅像建設の発起人のひとりとして、会長の委嘱を受けて一時教職をなげうって原型制作に没頭した。高村光雲の指導のもとに中心となって制作した原型（註18）は、深見平次郎の鋳物工場にて鋳造され、像高約三六〇センチメートル（一丈二尺）の平野国臣銅像が大正四年十月に福岡市西公園に建立された。

次いで大正五年七月から九月頃に、故小今井潤治像の原型制作の依頼が来た。筑紫高等女学校に提出した自筆履歴書には「築上郡宇ノ島故小今井潤治翁報徳彰会ハ銅像建設ノ為メ原型製作中途行キ難メル際ニ付同会ヨリノ依頼ニヨリ原型ヲ改作ス」とある。これからすでに原型制作は始まっていたが、中途で行き止まったので雪窓に依頼してきたことがわかる。雪窓が依頼を受けた理由のひとつに宗教が関係しているのかと思われたが、雪窓が筑紫高等女学校に採用される前（註19）であり、浄土真宗の繋がりはなさそうである（註19）。

このほかにも大正十二年に山口県長府に坐高約一二〇センチメートル（四尺）の絵師狩野芳崖銅像（註20）。大正十四年に平藤米太郎が鋳造した、佐賀県武雄市西福寺の誉与上人銅像（註21）。同年の長崎県佐世保市鶴渡越に深見鋳工場で鋳造した、像高約四五〇センチメートル（一丈五尺）の親鸞聖人銅像（註22）。大正十五年（一九二六）に無報酬にて一切を負担したという、福岡市西公園に建設された平藤鋳造所

制作の、像高約三〇センチメートル（一丈）の吉岡友愛大佐銅像（註23）。昭和二年に佐賀県武雄市に親鸞上人銅像（註24）。昭和四年に同じく西公園に像高約三〇センチメートル（一丈）の筑前の勤皇志士

加藤司書銅像（註25）を制作している。その当時の新聞記事に加藤司書功績顕彰会が「東京彫刻界の泰斗に原型制作を依頼する」（註26）と

あることから、当初は小今井潤治像同様、雪窓以外の彫刻家に依頼されていたと思われる。同年に続けて八女郡の農林事務所構内に稲の害虫駆除予防の先覚者益田素平銅像（註27）を、昭和五年に久留米市田主丸祇園社公園（現・素戔嗚神社裏）に像高約二一六センチメートル（七尺二寸）の素封家林田守隆銅像（註28）の原型を制作している。しかしこれらはすべて太平洋戦時下の金属特別回収で失われており、今では鑑賞することはできない。

また彫刻のほかに日本画でもすぐれた作品を制作している。大正十二年（一九二三）の福岡市記念館で開催された第三回福岡美術会美術展（註29）に「松」を、翌年の福岡県商品陳列所で開催された扇面団扇書画展覧会（註30）にも出品して、彫刻と日本画の両分野で活躍している。

雪窓は制作活動ばかりでなく地元の美術界発展のためにも尽力している。大正十一年（一九二二）に福岡市記念博物館と記念館で開催された、長政公三百年祭記念美術展では審査委員（註31）をつとめ、この展覧会を機に県下の美術家約四〇名が集結して、美術の向上発展のために結成された福岡美術会では、結成以来永く評議員（註32）をつとめている。

田中雪窓は筑紫高等女学校在職中の昭和六年二月五日午後、かねてより病氣療養中のところ逝去した。享年六十一歳であった（註33）。

銅像を鑄造した鑄物師石橋卯之吉について

小今井潤治銅像の鑄造をおこなったのは、福岡市大学通一丁目に鑄造所をもつ鑄物師石橋卯之吉である。そのことは台座背面の碑文の下方に嵌め込まれた青銅製板に、建設委員六人と石製台座を制作した石工国松藤太郎とともに名が記されている（資料3）。「大学通」は、いまの国道三号線石堂橋交差点の東にある千代三丁目交差点から東へ通じる、九州大学医学部正門前を通る通りで、「大学通一丁目」は九州大学医学部付近である（註34）。

石橋卯之吉は明治三十三年三月に吉塚から春吉寺町へ移転し、業務を拡張し鉾山用および精米用諸器械製作では確実に注文に応じるようにしていた（註35）。「移転拡張広告」には「弊工場事業ノ為メ肩書之処ニ移転仕」とあるが、それは石油発動機などの機械製作のためで、銅像などの鑄造は「大学通」の工場で行っていたと思われる。

当時の博多鑄物業界は江戸時代から続く磯野家と深見家が双壁であるが、ほかに同じく歴史を持つ山鹿家などの老舗に交じって、石橋家も着実に鑄物業界での地位を確保し、多くの銅像や記念碑などを鑄造している。石橋家の創業時は不明であるが、鑄造した事例を列挙してその活動をみることにする。

明治四十四年四月に据付け落成した、博多恵比須橋通（現・福岡市

博多区千代三丁目)の新道記念碑を鑄造。碑は恵比須が左脇に鯛を抱え千代松原から恵比須橋を指さしている姿の立像で、台座の石工は国松である(註36)。明治四十五年五月ころには、筑紫郡太宰府町(現・太宰府市宰府四丁目)の太宰府神社に奉納された青銅製神馬を鑄造。

これを報じた新聞記事の石橋鑄工所の住所は「福岡市外千代」となっている(註37)。大正三年三月ころには田川郡香春町香春の高座石寺に建立された医師加藤玄秀銅像を鑄造。原型は博多下祇園町の博多人形師中ノ子市兵衛が担当している。新聞記事では住所は「福岡市外医科大学通」で、工場名は「石橋卯之吉鑄造業工場」となっている(註38)。

同年四月ころ久留米市で開催された久留米共進会演芸場付近に設置された唐銅製馬を鑄造。共進会が閉会したあとは水天宮に奉納される予定と報じられている(註39)。同年六月ころに除幕式がおこなわれ、大分県宇佐郡封戸村(現・宇佐市)の自邸に設置された貴族院議員水之江浩銅像を鑄造。原型は博多下祇園町の博多人形師中ノ子市兵衛が制作している(註40)。さらに大正五年五月には嘉穂郡飯塚町(現・飯塚市本町)の真福寺の梵鐘を改鑄。新聞記事の住所は「粕屋郡箱崎町」とある(註41)。そして同年十二月十三日に築上郡宇島町字松中(現・豊前市)に設置された小今井潤治銅像が鑄造(註42)されている。さらに大正七年八月に逝去すると直ちに銅像建設が発起された医師宮城犬三の銅像を鑄造し、田川郡添田町野田にある賀茂神社境内に建立した(註43)。大正八年十一月に除幕式がおこなわれ、久留米市通町五丁目に設置された久留米餅の功労者国武喜次郎銅像を鑄造(註44)。大正十二年五月に筥崎宮の一の鳥居横に、粕屋郡笹栗町出身の衆議院議員

藤金作が奉献した青銅製狛犬を鑄造。石造台座には「福岡医科通り／鑄造師石橋卯之吉」と陰刻されているのが今でも見ることが出来る。同年十一月ころに粕屋郡篠栗町に建立された篠栗新四国霊場の功労者木原喜造銅像を鑄造(註45)。同じく篠栗新四国霊場の創始者藤木藤助銅像を鑄造(註46)。そして大正十四年四月に除幕式がおこなわれた、佐賀県小城郡小城町(現・小城市)の桜岡公園(現・小城公園)内にあった聖徳太子尊像を鑄造(註47)している。これらは主に新聞報道されたものを列挙したが、ほかにも鑄造作品があると思われる。これら銅像もまた戦時下に金属特別回収ですべて失われている。

平成二十六年九月二十八日に豊前市で「乗桂小今井潤治翁生誕二百周年祭」の記念事業が挙行され、郷土の偉人の頭彰がおこなわれた。地元では小今井潤治について、浄土真宗寺院の関係者で知っている人は多いが、一般市民となると小今井潤治のことを知る人はそれほど多くないと言われる。まして遠く離れた福岡市や太宰府市近辺で知る人は皆無と思われる。そこで、筑紫高等女学校教師である彫刻家田中雪窓が原型を制作して鑄造された、浄土真宗の熱心な門徒である実業家小今井潤治の銅像について、系列校である筑紫女学園大学の紀要に掲載するのはふさわしいことと思われるので紹介することにした。なお、本稿では敬称を略した。

また、本稿作成にあたっては近畿大学九州工学部教授橋富博喜氏、福岡県立美術館学芸員高山百合氏、福岡市博物館学芸員宮野弘樹氏をはじめとする方々のご協力をいただいた、ここに記して感謝申し上げます。

ます。

【註】

- (1) 小今井潤治銅像が戦時金属回収令で撤去された正確な年月は不明である。当時の新聞記事に「同省（商工省）では銅像の代用品としてセメントなどで丈夫な像をつくる研究を進めてをり銅像が持ち去られた後急に寂しくなることのないやう努めてゐる」（『福岡日日新聞』一九四一（昭和十六）年十月二十八日一頁）とある。ただし、「豊前の傑商万屋 乗桂・小今井潤治の生涯」（三浦尚司著、『海路』六号 二〇〇八年）には「現在の胸像は有志によつて再建されたものである」と、また『豊前市制五〇周年記念写真集 ぶぜん』（豊前市 二〇〇六年）には「現在のものは戦後に再建されたものです」とある。
- (2) 明治十年に本願寺が宇島教務所内に設置した開闢教校を、二年後に小今井潤治が職員、生徒、施設そして経営など一切引受けて、さらに講堂や学寮を新築して規模を拡充し乗桂校と改称して開校したもの。なお、同校は潤治死後は妻わさ子刀自が明治二十六年七月に逝去するまで維持された。（井上哲雄『真宗本派学僧逸伝』三四頁 永田文昌堂 一九七九年）
- (3) 銅像建設費は三三二〇円六五銭で、川内寿一氏が建設主任となつて町民一般からの寄付を募っている。（北澤憲昭総監修 田中修二監修 シリーズ・近代日本のモニュメントⅠ『銅像写真集 偉人の倂』一三四頁 ゆまに書房 二〇〇九年）
- (4) 銅像は大正五年に建設が始まり、鑄造が竣工して十二月十三日に据え付けが終了した。除幕式は不日挙行。（『福岡日日新聞』一九一六（大正五）年十二月十六日七頁）
- (5) 碑文にはこの銅像の作者に関するものは何も記されていない。ただし田中雪窓自筆の履歴書には明記されており、『銅像写真集 偉人の倂』一三四頁に原型作者は田中雪窓と明記している。
- (6) 田中雪窓の祖で福岡藩御用具足師の初代田中源工貞増（一七二七〜九一）は「福岡呉服町生」であり、代々家業を継いできた四代田中源工貞成もまた「呉服町」に住んでいた。従つてその子雪窓も「呉服町」生まれと思われる。（『田中家系図』『具足師田中家資料』福岡市博物館）なお「福岡県の近代彫刻―朝雲門弟と塑像家たちと」（福岡県文化会館（現・福岡県立美術館）一九八四年）には「福岡市呉服町67番」生まれと詳しく書かれている。
- (7) 代々大和（奈良）において武器製造に携わっていた岩井家であったが、岩井定堅が京都にでて具足師をしていたとき、慶長九年（一六〇四）に筑前国主黒田長政に招かれ福岡藩御用具足師となった。明和六年（一七六九）にその岩井家から田中家が派生し、雪窓の父田中源工貞成は初代田中源工貞増から数えて四代目となる。（『田中家系図』）
- (8) 平野吉蔵能栄は福岡藩の足軽で、福岡藩召抱えの神道夢想流杖術の第十五代である。ツチは天保十四年（一八四三）四月四日の生まれ、田中源工貞成の先妻シヅの後妻となる。なお維新の志士平野国臣はツチの兄である。（『田中家系図』）
- (9) 明治十四年（一八八一）に米国人宣教師C・S・ロングが創立したブ

ロテスタント派のミッションスクールで、寄付者の名を冠してカブリー・セミナリー（加伯利英和学校）と命名された。明治三十九年（一九〇六）に鎮西学院と改称。（『長崎県大百科事典』長崎新聞社 一九八四年）

(10) 「自筆履歴書」。

(11) 東京美術学校は明治二十二年（一八八九）二月に開校し第一回生が入学するが、同年九月に二回目の生徒募集があつて第二回生が入学してきたので、第一回生はすぐに二年生となった。この頃は九月に第一期が始まり、翌年七月に一箇年の課程が修了することになっていた。（磯崎康彦・吉田千鶴子『東京美術学校の歴史』五〇頁 日本文教出版 一九七七年）

(12) 雪窓が二年生になる明治二十五年九月に、専修科（三年間）は本科（四年間）と改正されたが、機械的に二年次を飛び越えて三年生となり、明治二十七年七月に当初通り五年間の課程を終えて第二回卒業生となった。（『東京美術学校の歴史』五一頁）

(13) 雪窓が手伝ったのは楠公像の大袖などの肩の部分らしい。（遺族談『福岡県の近代彫刻』）

(14) 「牛物置」の写真の裏に「明治二十五年九月成 雪窓 明治二十七年四月米国シガ（シカゴ）博覧会返送 該品ハ美術学校生徒咸作品トシテ出品セシモノナリ」と書かれている。

(15) 「自筆履歴書」。普通科では絵画と木彫の両方が習得されていた。（『東京美術学校の歴史』五三頁）

(16) 明治二十八年（一八九五）九月から明治三十五年（一九〇二）九月まで、東京の攻玉社中学校（現・攻玉社中学校・高等学校）付属女学校の

図画講師や、東京美術学校写生画科用石膏模型の臨時製作係、および同校予備校の絵画科彫塑科美術史教授。明治三十七年六月には高知県師範学校（現・高知大学教育学部）教諭兼舎監さらに女子師範学校教諭。明治三十八年七月から九月まで、高知市教育会黒板画法講師、明治三十九年八月には鹿児島県川辺中学校（現・鹿児島県立川辺高等学校）教諭に転入し図画科、習字科、植物図係を担当。明治四十二年四月から翌年四月までは、熊本市内各小学校を巡回して国定教科書の図画教授法を指導する教師に委嘱される。明治四十二年五月からは尚綱高等女学校（現・尚綱中学校・高等学校）教諭に転入、さらに熊本女学校教授も委嘱された。（自筆履歴書）

(17) 雪窓が東京美術学校在学中に、筑前の志士平野国臣を敬慕するがその面貌を知らない人が多いことに気づき、美術を志す甥として国臣の兄弟姉妹が生存中に聞き取りして肖像画を描くことを発起する。試作しては筑前に生存している同志らに見せて助言を得、国臣が泊まった京都の旅館の女将を訪ねて意見を聞いたり、あるいは豊岡藩に幽閉中に側にて世話をしていた人に服装や所持品にいたるまでの詳細な情報を取材し、教務多忙のなか八年かけて肖像画を完成させている。（田中雪窓「肖像由来記 平野国臣先生之像」『具足師田中家資料』福岡市博物館）

(18) 「美術学校教授高村光雲の監督下にて田中助太郎が原型を製作することになった」（『福岡日日新聞』一九一五（大正四）年九月二十五日五頁）。「像は高村光雲と田中助太郎の合作」（『福岡日日新聞』一九二一（大正十）年九月十七日二頁）。「平野国臣の銅像も高村光雲氏の指導の下に氏が主として原型を作つたものである」（『福岡日日新聞』一九三一（昭和

六) 年二月七日二頁。

(19) 田中家は日蓮宗で、菩提寺は博多区千代の法性寺である。(「田中家系図」)

(20) 芳崖のデスマスクなど関係資料を収集するなど研究して原型を制作した。(『福岡日日新聞』一九二三(大正十二)年九月十九日二頁)

(21) 『福岡日日新聞』一九二五(大正十四)年七月三日二頁。

(22) 『銅像写真集 偉人の俤』五四頁。

(23) 「軍神吉岡大佐銅像」『筑紫史談』第三十七集五二頁 筑紫史談会 一九二六年。

(24) 『福岡県の近代彫刻』七八頁。

(25) 「加藤司書銅像除幕」『筑紫史談』第四十六集五四頁 筑紫史談会 一九二九年。

(26) 『福岡日日新聞』一九二六(大正十五)年二月二日三頁。加藤司書顕彰会からは忠実熱心に原型制作に従事したことへの感謝状が贈られている

(一九二九(昭和四)年八月)。

(27) 『福岡日日新聞』一九二六(大正十五)年七月七日七頁、『福岡県の近代彫刻』七八頁。現在JAふくおか八女筑後地区センター構内にある胸像の台座にある頌徳文 一九七二年。

(28) 篠原正一『久留米人物誌』菊竹金文堂 一九八一年。

(29) 『福岡日日新聞』一九二三(大正十二)年四月三日七頁。

(30) 『福岡日日新聞』一九二四(大正十三)年七月四日三頁。

(31) 『福岡日日新聞』一九二二(大正十一)年三月二十六日七頁。

(32) 『福岡日日新聞』一九二二(大正十一)年四月二十四日二頁。六月一日

七頁。福岡美術会長石橋愛太郎の弔詞(一九三一(昭和六)年二月十三日)。

(33) 『福岡日日新聞』一九三一(昭和六)年二月七日二頁。自筆履歴書には後世の別筆で「二月二日死亡により退職」と書かれている。

(34) 大学通二丁目の石橋鑄造所の場所は確認できていない。ただし「石橋鑄造所」は『福岡市縦横詳細地図』第九版(昭和十三年版・銀洋社)では「大学通二丁目」の北側の「千代橋通」電停のところに記載されているが、『福岡商工案内地図』(昭和七年)の千代橋通電停の同場所には記載されていない。

(35) 『福岡日日新聞』一九〇〇(明治三十三)年三月十七日三頁、五頁。

(36) 『福岡日日新聞』一九一一(明治四十四)年四月十六日二頁。

(37) 『福岡日日新聞』一九一二(明治四十五)年五月二十日五頁。

(38) 『福岡日日新聞』一九一四(大正三)年二月八日九頁。

(39) 『福岡日日新聞』一九一四(大正三)年四月二十九日七頁。

(40) 『福岡日日新聞』一九一四(大正三)年二月八日九頁。水江浩吉(ママ)の寿像が石橋鑄造工場で一九一四年に竣工し(『福岡日日新聞』一九一四(大正三)年九月二十六日七頁)、二年後に除幕式が大分県宇佐郡の自邸

でおこなわれた(『福岡日日新聞』一九一六(大正五)年五月十一日七頁)という記事もある。

(41) 『福岡日日新聞』一九一六(大正五)年五月二十五日七頁。

(42) 『福岡日日新聞』一九一六(大正五)年十二月十六日七頁。

(43) 『福岡日日新聞』一九二二(大正十)年九月二十三日二頁。

(44) 『福岡日日新聞』一九二二(大正十)年九月二日二頁。

(45) 『銅像写真集 偉人の佛』〔図版篇〕三二〇頁。

(46) 『福岡日日新聞』一九二三(大正十二)年十一月六日三頁の記事では「石橋鑄造所」制作となっているが、『銅像写真集 偉人の佛』〔図版篇〕三

一〇頁では鑄造者は「佐藤卯助」となっている。

(47) 『銅像写真集 偉人の佛』〔図版篇〕四八頁。

【資料】

(1) 台座正面嵌入青銅製題字

「小今井潤治像」

(2) 台座背面嵌入青銅製銘板

「豊之鶴洲風光明媚北控防長三十六洋南負油布彦岳一帶連山偉人乗桂翁生于此地焉古稱山川靈淑之氣磅礴鬱積生偉人蓋右果然者乎翁諱末廣通稱助九郎後改潤治／豊前築上郡宇島町亀安正廣第三子妣大江氏以文化十一年八月十六日生幼而穎悟叔父小今井助右衛門養而為嗣以長女配之乃冒其姓家卅業商翁刻苦多年／深達斯道之秘奧見機如神億則屢中運籌多出常人意表此諸炎漢英傑兼准陰留侯之智勇即商界之名將也是以欲付驥尾者靡然來從翁督此輩縱橫馳驅氣圧万軍勢／如猛虎遂群羊眼中無勁敵矣翁常曰狂勝非智者不失退守之時一進一退必適其機故能致巨万之富世人称九州素封必先屈指於鶴州萬屋萬屋者小今井氏店舖之号／也明治戊寅造汽船龍丸後又造大龍丸竭力於航海業是為商船会社之起原云翁自奉薄而厚矜窮民每歲所施米四百十余石金八千余円云又累歲修繕宇島港也翁／屢代一般町民負担其費用投巨貨以成之於是町民益服其德景慕

之情猶赤子於慈母也翁多年蒙小倉千束兩藩之命專竭心力以勤其事又屢獻金助其用度由是兩藩／主屢賞其功勞賜名刀書画幅等且累陞秩從大里正進上士特別馬廻班実可謂一家之光榮也又有馬中津藩尽力藩主賜物賞之廢藩以後益致誠于公事明治甲戌獻一／千金於小倉県庁以供興學之資是歲村民失火延燒二十三戸翁捐八百五十金以救之官賜銀盃賞之是歲又為道路修繕費出一千金官特賜三重銀盃以賞之翌歲町／民復罹火災又施四百六十金後特起土木之事俾窮民得工錢以便糊口也丙子歲又出一千金以供県下小学資官賜三重銀盃賞之其他義舉甚多慶応以來捐金不下二十万金其事蹟載在別記翁夙婦依佛法喜真宗二諦之妙教至晚年道念弥深雖自處世務而常念報仏恩手不釈念珠如其仏室輪奐而華麗宏莊而清淨故入其室者自然／生崇仰之念每朝翁自作礼誦使家族皆列其後同音和之苟為求法不遠千里屢訪知識於都鄙又屢請高僧于自邸以聞法為無上之樂翁嘗夢宇佐宮之神輿入其邸翌日／有客携釈尊說法七処九会之画來曰是素所貼于宇佐神輿内之物王政維新後除之展転歸于我請大人幸購之翁感昨夢非偶然直忘其需裝演藏于家翁頻年上京詣本／山屢有所進納蓋崇敬之念不能自己也由是法主明知如上人寵遇殊渥每上京輒賜見乗桂之法諱即法主所賜也又親書自製和歌於短冊及懷紙賜之其他親書額字正／信偈和讚一部趙子昂婦去來書画幅同人馬画幅及銀天目等所賜不遑枚舉又任本山勘定及津村別院勘定甲戌歲光專寺檀徒議本堂改築之事謀諸翁喜出三千五百／金其他正圓寺本堂正法寺厨房教圓寺本堂本門等皆由翁之力而得改築者也古表宮拜殿足切神社參拜道等亦然乙丑之役小倉藩収諸寺洪鐘以鑄巨砲從此諸寺久／缺法器翁以為憾乃投巨資而鑄造五十八基納之諸寺從此華鯨朝夕殷々能俾聞者忽覺塵魂頓發道念皆翁之力也乙亥歲翁

納大藏經於我寺先人嘗願購之方募淨緣／受若子軼於黃檗山然未逮十中
之三翁乃投巨資貸受槩本二百余帙補其不足於是乎始至見完備矣丁丑冬
捐五百金於樂善社以補助其慈惠之業明治九年官許國民之／信教自由從
此外教將漸蔓延翁憂之且深慮宗門之前途每接緇流慨然說曰今日宗門之
急務偏在于養育人才十二年以獨力設宗乘專門之學譽名曰乘桂校聘東
陽／勸學等諸師盛施教育其名馳于四方一宗之學徒自遠通負茂屬集學業
隆盛非他譽之所企及翁之宿志於是乎始成爾來駸々殆至十年之久此間入
學者凡三千人今日／吾宗門之干城多出於此校矣其所費金額凡二十萬金
云報仏恩之經營莫大焉翁在浪華別邸一夕暴疾疾藥不及而歿矣明治二十
年七月十三日也享年七十有四翌日／假殮越十七日歸葬于宇嶋櫨山先塋
之次配小今井氏有五男五女長子高之助早世二女嫁菅原氏有故大婦早歿
第二子宗治嗣無幾亦歿其他男女皆大宗治無子宗族／胥議俾翁之侄小今
井正史繼其後翁之歿距今始三十年矣然鄉民皆浴其遺沢景慕不已今茲有
志諸士醜資將建翁之銅像勒其功績傳諸不朽屬銘于余々乃拋狀詮叙／係
之以銘銘曰

豐有偉人 商界之傑 富致鉅萬 厥心高潔 常圖公益 万金屢捐
恤窮濟衆 惠沢普延 夙敬三贊 淨信堅固 建譽育英 法城維護
鄉民追慕 鑄像樹碑 道德千載 永仰英姿

大正五年丙辰十月

本願寺耆宿

利井明朗題額

龍谷勸学

松島善海撰文

(3) 同 下方嵌入青銅製銘板

「建設委員／小畑兵三郎／辛島並家／中尾欣治／川内壽一／宗吾郎／
豊島菊太郎／福岡大学通一丁目／鑄造所 石橋卯之吉／同 勸助／博

多横町／石工 國松藤次郎／同 藤七

(4) 石碑 表碑文

「浄土真宗乘桂校旧跡／尊由書 (印)」

(5) 同 裏碑文

「翁去リマシテ四十八年 恭敬合掌

師逝キマシテ三十二年

二千五百九十三年建之

財施主 小今井潤治翁

法施師 東陽圓月和尚

淨財額 金貳拾余万円

所化衆 総人員參千人

」



② 小今井潤治
(豊前市教育委員会生涯学習課文化芸術係提供)



① 小今井潤治銅像台座
(橋富博喜氏撮影 2016年)



④ 田中雪窓
(『福岡県の近代彫刻』福岡県立美術館より転載)



③ 銅像台座背面嵌入青銅製銘板「撰文」
(橋富博喜氏撮影 2016年)